

III

福井大学の現場教育へのアプローチに関する一考察

～他県の附属学校教員（元）の視点から～

松田（分校）淑子

1 はじめに

福井大学教職大学院設立のため、2007年度4月、新スタッフとして、福井県からの派遣教員3名（長谷川義治氏、淵本幸嗣氏、上野澄子氏）を含む7名（岸野麻衣氏、伊禮三之利氏、柳伸明氏、松田（分校）淑子）の教員が採用された。採用直後に柳氏が急逝され、福井大学に1年前赴任された佐分利豊氏のご自身の意思で加わり、これまでの5名（寺岡英男氏、森透氏、松木健一氏、柳澤昌一氏、石井バークマン麻子氏）の先生方を含め、現在、教職大学院の準備委員会は12名のスタッフで構成されている。私自身も、その新スタッフとして家庭科教育との兼担で採用された一人である。

私は、これまで、石川県の金沢大学教育学部附属高等学校（以下、金大附高と略す。）にて22年間教員生活を送ってきた。現在、福井大学に着任して2ヶ月余りが経った。現場教員から大学教員への変化、県の違いなどがあり、日々全てが新しい。もちろん、現場教員から大学教員への変化とは言え、実際、大学にとって最も近い現場である附属学校の教員であったこと、県の違いとは言え、同じ北陸の隣県であることなど、一見大差はないかのように思える。しかし、最も近い大学と附属学校であるからこそ、様々な場面を共有しつ

つも、その立ち位置や視点は正反対であるため、寧ろ立場による違いが際立って見える。また、同じ北陸地方の隣県とはいえ、県民性や大学システム、大学及び附属学校の雰囲気や関係性は大きく異なっていた。何もかも異なる世界に行った時は、違いは当たり前であり、何が差異の源なのかがわかりにくい上、逆に類似点の方に目が行くものである。しかし、共通点が多いほど、差異そのものも、差異の原因も如実に見えてくる。

福井大学の教育実践研究は、全国レベルにおいて高く評価されており、私自身、数年前に本スタッフの一人である森氏の講演を伺い、その取り組みに深く感銘を覚えた。森氏らの研究の記録も数多くの書籍等に記されている。但し、それらは当然、福井大学教員自身が分析し、記したものであり、研究や改革の担い手としての視点からまとめられたものである。さらに、当事者ゆえに、意識せずに行っていること、もしくは享受していることもあるように思われる。

時が経ち、内部になってしまうと逆に見えなくなることもあるであろう。着任直後であるからこそ気づくこと、隣県の附属学校教員としての視点が残ったままの状態、福井大学の教員として現場教育にかかわっているからこそ感じることのできる、福井大学の教育現場へのアプローチの意味をまとめておきたいと思う。

2 目的及び方法

本論は、先行的に実践し高く評価されてきた、福井大学大学院教育学研究科学校改革実践研究コースを核とする、福井大学の現場教育に対するこれまでの取り組みについて、教職大学院設立のための新スタッフという、半ば外部の視点から再評価するとともに、課題等についても提示し、今後設置が実現するであろう福井大学教職大学院の充実の一助とすることを目的としている。

そのための方法として、教職大学院、及び教育地域科学部の新スタッフである私自身が、着任後2ヶ月余りの期間にかかわってきた現場教育、主に附属中学校へのアプローチを整理し、考察する。

3 結果及び考察

(1) 学び合うコミュニティとしての教職大学院スタッフ

現場教育へのアプローチに入る前に、教職大学院スタッフ自身のことについて触れたい。福井大学の教職員大学は、スタッフ自らが「学び合うコミュニティ」を目指しているように思われる。私がそう感じた具体例二点を以下にまとめる。

①職員室

「学び合うコミュニティ」をハード面で感じられたのが、今年度当初に設けられた「教職大学院スタッフの職員室（仮称）」である。この職員室で、毎週火曜日の午後には、スタッフ全体の会議とグループ学習会をもっている。

前任校である金大附高でも、教科ごとの研究室制度が採られており、一般校における職員室はなく、全職員が集まるのは、週に一度の会議室における職員会議のみであった。研究校である附属学校においては、このようなスタイルは珍しくない。しかし昨年度、校舎全面改修の折、8ヶ月間のみ借用した校舎には、研究室スペースはなく、職員室に全教職員が集まることとなった。8ヶ月限定ということも影響していたであろうが、教職員間の協力体制、学校全体の把握、生徒理解、他教科理解などにおいて、大きな向上があったと感じられた。但し、個々人の生徒の指導や相談に際しては、やはり小スペースが望ましい。教員間の雑談レベルではあるが、「職員室を主としつつ、生徒の個別指導のために、各教科または各教員の個室もあるのがベスト。」という見方が教員たちの意見であった。

上記のような経験からも、「教職大学院スタッフの職員室（仮称）」と各人の研究室との併用は、組織運営及び教育と研究の両立上、大変有益なものであろう。現在はまだ、書籍やテーブル等のみで、やや会議室のような空間ではあるが、今後、徐々に設備等も充実させ、スタッフが長時間過ごし安い空間になっていくように改善したい。

「学び合うコミュニティ」の実現において、この「教職大学院スタッフの職員室（仮称）」の存在は、非常に大きな意味をもっていくであろう。

一般に、小・中・高等学校において、職員室は当たり前存在する空間である。しかしながら、設立当初より長年、研究にその主軸をおいてきた大学においては、通常、職員室という空間はない。教職大学院のみならず、研究と教育、そして地域貢献という任務が求められる現代の大学において、そのハード面の改革は重要な課題であろう。

②グループ学習会

スタッフ間における学び合いを重視していることは、従来からの先生方が企画した「課題研究」という全スタッフによるグループ学習会から感じることができる。

「課題研究」最初の学習課題は、福井大学教育地域科学部附属学校の紀要を全員で読み込むことであった。附属学校の紀要を読むことによって、新スタッフが、各附属学校を知り、さらに福井大学教職大学院の展望を考えることが目的であった。一般論からすれば、現場と密着した姿勢としてはなるほどと思うことであり、まず初めに附属学校を、というところも、順当なことのように思えるであろう。しかし、私の前任校である金大附高でも毎年紀要を発行していたが、その内容は各自の自由であり、そこから、各執筆者の研究の足跡は読み取ることはできても、学校そのものを知る、ましてや福井大学の教職大学院のあり方を理解し展望を考える、という趣旨は現実的には難しいことに思われた。その疑問に従来からのスタッフである柳澤氏は、「紀要を読めば学校がわかります。ばらばらなもの

またその学校の特徴です。」と答えられ、ようやくその意図が半分理解できた。後の半分は、とにかく実際に、ばらばらでない紀要というものに触れてみるしかないという思いで、担当となった附属中学 2005 年度の紀要を拝読した。

紀要からは、研究校として学校全体で真摯に授業作りに向きあっている様子が伝わってきた。同時に、福井大学の教職大学院が、個々の教員への支援に止まることなく、学校創りという視点でサポートすることをめざしていることの意図がよく理解できた。従来スタッフからのこの最初の学習課題は、新スタッフである私にとって、多くの理解や学びを与えてくれた。

教職大学院には、実務家教員というポストが設けられており、その中には県からの派遣教員も含まれているというように、様々な立場のスタッフが混在している。従来スタッフと新スタッフ、専任教員と兼任教員、また、実務家教員、派遣教員、みなし教員など、それぞれ立場から問題提起を行ったり、それぞれの得意領域を提供し合えるよう、課題内容も検討していきたい。また、グループ学習会は話しやすく内容を深めるには最適であるが、折角の成果についてスタッフ全体での共有ができない。各テーマ学習の最終には、全体報告会などを実施していくことなど、学習会の形式の検討なども今後の課題としたい。

スタッフ間の学び合いを重視する上で、このグループ学習は、大きな可能性を秘めているであろう。

一人での研究、同様の問題意識をもつ者との共同研究が主流である大学にとって、幅広い視点を持ち、意見を出し合い、学び合うことは、今後の大学教育や研究の進展においても強く求められていることであろう。このような学び合いのスタイルが、大学全体にも広がり、浸透していくことが望まれる。

このような「学び合うコミュニティ」を目指す教職大学院、及び福井大学教育地域科学部の新スタッフ一人として、現場教育かかわってきた経験と考察を以下に示す。

(2) 福井大学教育地域科学部附属中学校とのかかわりから

①福井大学教育地域科学部附属中学校の研究体制

福井大学教育地域科学部附属中学校（以下、福大附中と略す。）とのかかわりを示すにあたり、まず福大附中の紀要等を参考に、その研究体制等について簡略に記す。

福大附中では、5 年スパンのテーマを設定し、それに年度ごとのサブテーマをつけ、研究を実施している。新テーマの決定は前テーマとの関連も持たせているため、腰をすえたロングスパンの研究を行っていると言える。「1963 年の独立開校以来、一貫して主体的に学ぶ力、協働的に探求する力を育もうと実践研究を続けてきた。・・・子どもや教師が入れ替わり、激動的に時代が変化しても、私たちが教科においても総合的な学習においても大事にしてきたキーワード、それは「探求」と「コミュニケーション」である。」(2005 年度紀要 P1~2、研究概要総論より引用)と記される通り、これまでの研究の根底には一貫して「探

求」と「コミュニケーション」がある。

国立大学の附属学校の使命として、実践研究は教育実習と並んで重要な柱の一つであるが、実際にその使命を果たしている附属学校は少なく、進学校としての役割が第一義となっている学校や、法人化に伴う大学改革の波で、トップダウン方式の泥縄的な共同研究を行っているのが現状である。そのような中で、開校以来、学校全体で実践研究を重要な柱とし、継続している附属学校の存在は大変貴重である。

とりわけ重要なのは、各教員の研究が教員同士の「コミュニティ」によって支えられている点であろう。具体例の一つとして、平成12年度からシステム化された部会形式をあげることができる。部会は、一部会に研究企画1名、5教科とそれ以外の教科の教員が無作為に半数ずつ入り、合計4名の教員で構成されている。部会会議は毎週時間割上に位置づけ、実施されている。部会ごとに企画される公開授業と省察を繰り返し、年度末に、生徒主役の「物語風」の実践記録を各自でまとめている。このような、教師たちの「探求するコミュニティ」の中で、新任教員は福大附中の研究を体得し、やがて新たに創りだしていくというスパイラル的継承を行っている。

さらに、「総合的な学習の時間」が始まる以前より福大附中で実施されていた「学年プロジェクト」は、教員全員と生徒たちの3年間の協働でもある。私は常々、教員の「総合的な学習の時間」に対する評価、つまりその教員が「総合的な学習の時間」をプラスに評価するか否かは、その教員自身が、自分の授業や学校を探求しデザインできることをプラスに思うか否かを示すリトマス試験紙であると述べてきた。福大附中では、全教員と生徒たちがともに、授業や「総合的な学習の時間」を「探求するコミュニティ」となっている。

このような研究や授業のスタイルが、大きな背景、学校文化となり「福大附中」という「学校」そのものが個々の教員を支えているのであろう。多くの附属学校同様、公立学校との交流人事が一般化している福大附中において、教員の入れ替わりは当たり前である。従って、この状況下で学校独自の研究を維持継続していくためには、裏を返せば、「学校」そのものが教員の学びの場であり、支えとなることが必要不可欠なのである。

今後の日本の教育界を展望する時、この福大附中のような、教員の学びの場としての「学校」が、個々の学校において確立されることが望まれる。同時に、福井大学教職大学院としても、まず「拠点校」となった数校の学校において、このような展開がなされていくよう支援していかなければならない。

②研究企画会議への参加

福大附中では、毎週木曜日の4時間目に研究企画会議が設定されており、委員の先生方が、学校全体の研究の方向性を検討している。この企画会議に、今年度当初より私も参加させて頂いている。これは、大学と附属学校が研究を柱に日常的つながっていることを見える形で示す具体例と言えよう。大学からの参加は約20年前から始まり、当初は寺岡、森、松木、柳澤の4氏が参加していた。近年は柳澤氏が中心的に参加し、今年度から私が

加わり、大学から2名参加という形が常となった。

当初、「連携」を冠にすえた特別な会議ではない、附属学校独自の日常的な会議に、大学教員が参加するといシチュエーションそのものが理解できなかった。正直なところ、本当は毎週ではなくたまに参加する程度であろう、大学からの参加は附属教員から迷惑がられているであろう、所詮大学教員はお客様に過ぎないであろう、などと思い込んでいた。しかし実際、ほぼ毎週の参加を繰り返すうち、委員の先生のみならず、福大附中の先生方が皆極自然に受け入れてくださっていること、立場の違いに特別の違和感がないことを実感してきた。現在では、大学教員も福大附中における「実践研究」の創り手の一員として加わっている、という認識で参加するようになった。

長年の継続参加は、大学と附属中学との間に、一方通行でも、形式的でもない関係性が築かれていることを立証していると言えよう。換言すれば、異なる組織同士のつながりとは、形式的なものだけでは、継続することや価値をもたせることはできず、双方の地道な努力と真摯な態度によって培われていくものだと言えよう。

③家庭科教諭とのかかわりと研究大会

家庭科教諭である吉川裕子先生を初めて拝見したのは、その年の全附属学校新任教員が、大学の教授会の場に訪れ、挨拶された場面であった。まず、このように、新任附属学校教員が全学部教員に紹介される機会があること自体、附属と学部の密な関係を示している。しかし同時に、本来は、私たち新任大学教員も、各附属学校に挨拶に出向くのが、双方向の関係なのではないだろうかという疑問が残った。

4月半ばには、吉川先生が家庭科教育担当教員の荒井紀子先生の研究室に授業相談に訪れ、私も参加させて頂いた。以来、6月1日の福大附中研究協議会の研究授業に向け、何度か検討会をもった。新任の吉川先生には、周囲の先生方より、教科内容については、大学の教科教育の先生にどんどん相談に行くようアドバイスがなされたと言う。一方、今年度の教育実習生となる学部の3年生とともに、吉川先生の授業を参観（後述の「教育実践研究」の一環として）させても頂いた。教科による差もあるとは聞くものの、学部教員と附属学校教員の教科連携において、このような信頼関係や連携システムが確立されていることは大変貴重なことであろう。

附属学校の研究大会の助言者として当該教科の大学教員が出向くのは、各大学と附属の間において一般的ではある。しかし内実は、お客様の立場で当日のみ参加する大学教員と、所詮机上の空論だと、ほとんど聞く耳を持たない附属学校教員、といった対立関係すら見られることも少なくない。私個人は、教科教育や教科専門の大学教員と日常的に数多く共同研究を行ってきたが、これはレアケースであった。残念ながら、本来共存してこそ意味のある理論と実践は、大学と附属学校の間においてさえ別物となっているのが現状である。

福大附中の研究大会においては、事前に全校一斉の研究会をもち、助言者並びに県内の公立校教員複数名の協力者が集い、授業構成を始め、研究大会全体について検討をしてい

る。このシステムは福大附中の企画によるものではあるが、結果的に大学教員と附属学校教員相互の連携を支えるシステムとなっている。福大側の「教育実践研究」（後述）でのシステムとも相俟って、福大附中の研究大会（6月1日実施）への福大教員の参加数は約40名と、全学部教員の半数に近い。助言者ではない専門科目の教員も自発的に参加しており、全日程参加の教員も多数見られた。正確な数字は調査していないが、おそらく、他大学では考えられない参加状況であろう。また、学生においては、教育実習当該学年の3年生は授業への全員参加（後述の「教育実践研究」の一環として）が必修ではあるが、協力校への教育実習中である4年生を除き、1・2年生でも多数参加し、授業後の分科会やその後の全体会まで多くの学生が参加していた。一般参加者270名（うち県外者50名）という多数の参加者と合わせ、大会当日は各教室、廊下も含め身動きが困難なくらいの参観者であった。改めて、福大附中の研究への期待度を知るとともに、その研究に学部教員の多くが関与していることが明瞭に認識できた大会であった。このような、学部と附属のシステム上のすり合わせも、連携にとって必要不可欠であろう。

④教職科目『教育実践研究』

福井大学教育地域科学部のカリキュラムに位置付けられている『教育実践研究』とは、他の教育学部では目にしない、福大の特徴的な教職科目である。学部と附属を最も強固につなぐ「教育実習」を支える位置にある科目であるため、特にここで論じておきたい。

複数の授業担当者の中の、サブ的な者として携わった経験からの理解ではあるが、この科目を極簡略に述べれば、「教育実習を核とした事前事後の学びを、大学教員、附属学校教員、異学年間や事務部との連携によってサポートする科目」と表すことができる。具体的には、まず、教育実習に至るまでに、複数回の附属学校授業見学と見学後のグループでの授業検討会、模擬授業の実施、教育実習体験者である上級生の経験談聴取、上級生の実習中のビデオ（工学部の学生の協力により作成）視聴などが行われる。学生の教育実習中には、担当教員や事務部による手厚い学生支援、及び実習校への配慮がなされる。教育実習後には省察を行い、学生は、それら一連の学びを個々のポートフォリオとしてまとめる。学生にとって、大変学びの大きい科目であり、それを支える大学教員や附属学校教員の熱意と使命感、上級生による下級生への支援、既成の事務機関としてのパラダイムを超えた事務部の積極的参加と連携などがシステムチェックに整ってこそ成り立っているものであり、福井大学教育地域科学部総出で支える科目と高く評価することができる。

教育実習は、学部と附属の最大の接点であり、それ故、逆に両者が最も対立してしまう場面ともなりやすい。将来の教員を育てる学部教育において、教育実習は非常に重要な要であり、その前後の指導や、システム上の学部と附属学校の連携は最も丁寧に行われる必要がある。今後、この科目やシステムがさらに充実されていくよう努めたい。

(3) 啓新高校とのかかわりから

現職のまま、今年度大学院生となった啓新高校家庭科教諭である坂本里美先生と、4月末のクロスセッションでお会いして以来、現在までに以下のようなかかわりをもってきた。

- 4月28日 大学院の集中講義であるクロスセッション後、専門領域等を伺う。
- 5月9日 啓新高校にて、大学院での研究の抱負や、高校での担当授業などについて伺う。
- 5月14日 生活文化科2年生「被服構成」《パジャマ作成》の授業参観。
- 5月22日 啓新高校にて、「被服構成」の授業の省察、及び「家庭基礎」住生活領域の授業の検討。
- 5月28日 福井大学教育地域科学部生活科学コース3年生の授業の一環として、学生5名とともに、生活文化科2年生「被服構成」《パジャマ作成》の授業参観。
- 5月30日 生活文化科2年生「被服構成」《ブラウス発表会》の校内公開授業を参観。
- 5月31日 調理科1年生「家庭基礎」《住生活と消費》の校内公開授業を参観。
- 6月2日 クロスセッションにて、松田（分校）のこれまでの実践研究に関する報告発表があり、院生である坂本先生も受講。
- 6月7日 啓新高校にて、5月30日及び31日の校内公開授業整理会に参加。

啓新高校は、福井大学の拠点校の一つであり、荻原昭人校長先生自ら学校改革コースの院を修了されている。校長先生を中心とした学校改革、授業改革の渦中、今年度、坂本先生も大学院に入学された。坂本先生の指導教員は森先生であるが、私が昨年まで高校の家庭科教員であったことから、教科教育の視点で補佐をさせて頂いている。

坂本先生のご専門は被服である。啓新高校は伝統的に被服実習に力をおいてきており、当然、坂本先生の被服実習技能は、一般の家庭科教員とは格段の差がある。しかしながら、被服実習技能が日常的に必要なではなくなった今日、生徒たちの技能も当然低下し、その意欲も削がれてきている。この状態を脱却するため、これまで作品作りの連続であった授業に、作った作品の発表会を取り入れることで生徒たちの作る意欲を喚起しようと、森先生のアドバイスを受け、昨年から発表会に取り組んできたそうである。私も、実習や発表会の授業を参観させて頂き、発表会における工夫点等、作品発表の授業におけるノウハウについてのアドバイスなどをさせて頂いた。但し、教科教育の視点から言えば、「被服構成」の授業とは、被服実習だけでは不足である。今後徐々に、魅力的な授業展開を坂本先生とともに開発し、生徒たちの意欲を高めていきたいと思っている。

また、当初坂本先生ご自身は、「家庭基礎」については、授業研究の対象外としていたようであったが、やはり、教科教育の視点から言えば、土台となる必修科目である「家庭基礎」の授業を検討することなしに、専門科目のみ検討することは望ましくないと思い、「家庭基礎」の授業公開や検討の提案をさせて頂いた。早速、その提案を受け「家庭基礎」-住生活と消費-の校内公開授業を実施された。各科代表者による授業整理会で出された課題等をもとに、今後、家庭科教育全般について支援をしていきたい。

福井大学の現場へのアプローチは、学校全体の改革を共同研究の柱としており、それが他大学の取り組みから抜きん出た所以でもある。現代の学校や教育が直面する問題の本質を考えた時、各教科教育に基づくカリキュラム開発よりも、学校全体の改革を優先させたことは確かな選択であったと思う。しかしながら、今後更なる改革の深まりを進める時、教科教育の視点を強化していくことは必要不可欠となってくるであろう。

4 まとめ及び今後への課題

本論は、福井大学の現場教育に対する取り組みについて、新スタッフの視点から考察したものである。

福井大学と福大附中の連携は、一朝一夕にして出来上がったものではなく、長年にわたる、日常的、継続的な双方向の働きかけによる信頼関係と連携システムをベースに、事務部によるシステムのバックアップなども得た上での福井大学総出の連携であり、実践研究であった。この体制を維持、強化していくことが、今後、拠点校を始めとする現場教育へのアプローチを進めるに当たり、重要な点となってくるであろう。

一方、現代の学校や教育が抱える問題は、教員が個別に対処できる範疇を超えており、学校教育全体の転換が求められている。従って、福井大学の学校改革という視点は非常に重要であるが、学校改革を推し進める上で、今後、教科教育の充実が必要となってくるであろう。今後の拠点校等へのアプローチにおいても、福井大学と附属中学のような連携をベースとしつつ、さらに教科教育の視点を充実していくことが望ましいと思われる。

また、自らが「学び合うコミュニティ」を目指す教職大学院スタッフのあり方は、学校現場への提案であるとともに、大学改革への要素も兼ね備えているのではないだろうか。

【謝辞】

本論をまとめるに当たり、ご多忙の折、快くインタビューをお引き受け頂いた福大附中の向当誠隆氏に御礼申し上げます。

【参考文献・引用文献】

- ・ 『中学校を創る 探求するコミュニティへ』福井大学教育地域科学部附属中学校研究会 著（2004 年）
- ・ 福井大学教育地域科学部附属中学校 2005 年度紀要(2005 年)
- ・ 福井大学大学院教育学研究科学学校改革実践研究コース修士論文『協働の実践を省察、再構成する力を培う社会科』向当誠隆著（2005 年）

